

# 有島武郎研究

## 教会退会後の自然感をめぐって

(一)

宮野光男

先に公にした小論「有島武郎研究——教会退会後の自然感をめぐって」〔以下「(一)」と略記する〕は、有島の教会退会後の自然観を一つの手がかりとして、有島がいわば魂の所産としての自然を希求するものであり、「自然そのものである芸術家自身」〔『芸術について思ふこと』大11・1〕であろうとすることを人生の目標にして生きていた事実を明らかにしようとしたものであった。そして更に有島のこの自然観は、彼の個性の無限の拡大の可能性に支えられたものであり、その意味では有島のキリスト論における「人間イエスへの憧憬」の芸術への反映であるともいうことのできることを指摘した。

有島の教会退会前の自然観において、肯定的なものと否定的なものとの相反性が、人間観における肯定と否定との二元的な観点と相俟っていたことはすでに述べたところであるが、「(一)」で考察した自然観は、主として肯定的な、いわば慰藉する自然の系列に属する自然であった。しかし、このことは、否定的な、罪の告発者としての自然の系列に属する自然が、有島の精神構造から姿を消してしまったことを意味しているわけではない。実は教会退会後の自然観を分析することによって退会前と同様に「(一)」の第二節において瞥見したような、否定的な自然観が、人間は不完全にして調和を破る存在であるとする否定的な人間観と相俟って、有島の精神構造に定着していることを知ることができるのである。

本論では主としてその否定的自然観の検証を通して、有島の精神構造の一面

を解明してみたいと思う。これは、有島の生涯を縦に貫く否定の系譜——カインの末裔意識と呼ぶことのできる——の解明という意味をもった試みであり、その意味では作品「カインの末裔」論ということもできるのである。

二

教会退会後の有島の肯定的な自然観が、肯定的な人間観、つまり個性の無限の拡大の可能性に支えられている、一種の理想状況でしかなかったということ、有島の現実がそれとは逆の、まさに閉塞状況であったことの逆説的表現であるということになる。事実、教会退会後の有島の自己認識は、はなはだ否定的なものだった。それは、人間を自然に対比して観ようとすると、とくに明らかになっている。

人は自然を美しいと云ふ。然し、それよりも自然は美しい。人は自然を荘厳だといふ。然しそれよりも自然は荘厳だ。如何なる人が味無し色説したよりも以上に自然は美しく荘厳だ。(「自然と人」大10・8)

自然の本質が美であり荘厳であることを有島はどのように認識している。しかし有島は本質が美であり荘厳であるということが、確かであればあるほど、それに対する人間が、いかに卑劣な、醜悪な存在であるかを思わざるを得ない

というのである。

或る人は、かくばかり自然が美しく荘嚴であるのどうして人間はかくばかり醜く卑劣なのだ歎じ、そこに人類の救ひ得べからざる墜落を痛感するだろう。(同前)

勿論、このすぐ後で、有島自身については将来の可能性において、その自然にふさわしい人間になり得る存在であると述べている。しかし、このことは「(-)」において言及したように、有島が自律的な、自己充足的ないわゆる「本能生活者」であることを自らのうちに確立することによって可能となる自然観であり人間観だったのである。つまり有島にとっては、否定的な人間存在であることの自己認識の方が、より実感的状況であったということができよう。たとえばそれが「宣言」(大6・7)において、有島の一分身であるBが、荒くう颱風にことよせて「懼るべきかな自然。真に憐むべきかな人。自然如何に狂歌乱舞の痴態を尽すとも、そがうちには敵かにして破るべからざる諧調あるものを。人は自然の一分身として生れながら、何故に、事毎に、諧調を乱すに、しかく巧みなるや」と、人間存在の醜悪さを慨嘆しているところなどその一例であろう。これは、明治三十九年十二月二日付の日記の「自然如何に狂ふとも其声には常に破る可からざる調和あるものを。人自然の一分子と生まれて何故にしかく自然の調和を破るに巧みなるや」という人間観——自然観——が作品の中の有島の分身Bの思想を表わす重要な言葉として生かされているところであって、自然に対比した人間が、否定的な存在であるという考え方が、有島の精神構造に、根深く定着している事実を物語っているように思われるのである。しかも、この自然観が、単なる象徴的な心象描写の媒体としての自然だけを意味しているのではないところに有島の自然観の特色があるということができよう。勿論、対比された自然が完全であり調和ある存在であることは、自己の不完全さ醜悪さについての、一種の逆説的な表現であろう。「自然なるも

のは一見人間と対峙して不変の相を持っているやうに見えるながら、実は人間そのものの、投影にすぎない。(中略)自然が人間に印象を与へるのでなくして、人間が自然から印象を切り取る(以下略)」「(芸術に就いて思ふこと)大11・1)ののだというように、有島にとって自然は一種の心象描写の媒体であったことは確かである。しかし有島の自然観は単にそれだけのものではない。それが一面において心象描写の媒体としての性格をもったものであったとしても、志賀直哉の場合のように彼の感情の動きが直接的に表現されるという、あくまでもその主体が人間の側におかれている自然描写ではないのである。(註1)先の例からも明らかであるように、その自然は常に一定の枠をもった実体として考えられているのである。それは「美」「荘嚴」「諧調」「調和」という言葉で表現されているところからも明らかであるように、「完全なる自然」のイメージをもったものである。人間がそれとの「有機的結合」を自論むということも、あるいはその「自然そのもの」になるということも、つまりは完全なる自然との結合であり、人間の完全化への志向を表わしているのに他ならないのである。このところに、有島の自然が単なる心象描写の媒体としての自然だけを意味しているのではない、自然観の特殊性があるように思われるのである。さて、それでは、その「完全なる自然」とはいったい何であろうか。その思想的背景の由来と、有島における意味とを明らかにしなければならぬのである。

### 三

有島の信仰が、「神は萬物にLifeを與ふるものなり。」(明32・2・21・日記)とし、自然はカーライルがいうところの「神の衣裳」であることを是認するところから始まったこと、つまり自然が単なる景観的自然であることから「神の衣裳」であり神そのものへと変化したことをその内容としていたことは、すでに拙論「有島武郎研究——自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察

」において述べたところであるが、

我が真生命の生れし故郷は札幌なりき。我が嘗めたりしやるせなき苦痛、味ひたりし深き歡喜の是等は、凡て札幌の自然と人が余に供したる処なりき。

〔明34・7・23・日記〕

というように、有島にその自然が「神の衣裳」であることを教えたのは、他ならぬ札幌という特殊な精神風土であったということができよう。就中、新渡戸稲造の存在は、有島に自然が「神の衣裳」であることを教えたという意味で忘れることのできぬものである。

明治二十九年八月、札幌農学校入学のため渡北した有島が、新渡戸の家庭に入れられ、公私両面にわたって指導を受けたことは周知のことであるが、瀬沼茂樹氏が指摘されているように、(註2) 札幌における初期の生活は、キリスト教信仰とは本質的には無縁のものであった。勿論、毎日曜日、新渡戸宅で開かれたバイブルクラスに出席しているが、それは有島の知的興味を満足させるための一行事であつたにすぎないのである。したがって、新渡戸からの影響というものはキリスト教という宗教に限定されたものではなくもつと一般的な精神構造の最基底部の形成に關つていたように思われる。当時の有島の感想に、

此頃 Sartor Resartus の講義益々佳境に入り人をして聳耳張目思はず快を呼ばしむるもの多し。殊に其所論大に仏教(殊に禅学)に酷似せる所にありて此人佛書を讀みしにあらざるかの感を抱かしむる事極めて多しとす。国の東西を問はず真理は同一点に帰する所見る可く、又世の古今を問はず正当なる人心が同一方向に向つて走るを見れば、吾人は転た各自仏と同じく Carive と同じく或る大真理を grasps する事を得るならんと考ふ。(明30・6・1、日記)

というものがあつたが、これを見ても、有島が新渡戸やカーライル、あるいは仏

教から何を期待していたかを知ることができよう。さらに、この感想が新渡戸の一種の折衷主義的信仰の反影と見ることもできよう。(註3) 当時の新渡戸の感想に「月影多々」と題するものがあるが、これなどは一読するときに、まことに神秘主義的な自然観が横溢しているのであつて、もつとも日本人の心情に抵抗なく受容される類のものである。

船、打狗の港外に碇泊して、潮時を待てり。甲板人影なし。予独り欄干に凭りて月ことに明かに、海、浪を揚げず。

微風、静けき水面に動き、死の時を呼び醒まして、漣波を躍らしむ。

二つなき月を川風にかにして

波のうねうねまきちらすらん

予の思想は光體を超越す。讚美をざるに、我が昏頭に來り、予は跪いて曰ふ、「アー汝名づけかたき偉大者よ、汝独り生き、汝独り照らす。汝なくば世は死せん。汝の光なくば、宇宙は暗し。蠕虫の脆き一生も、日輪の赫耀たる運行も、かゞやく海も、果なき我が息も、皆共に汝が永遠の生命の反照なり」と。

予再び頭を上げ、月を見て、我に似たる靈體を見、呼びて我が姉妹よといふ。(明治三十年三月打狗) (「隨想録」、傍点筆者)

新渡戸が、その本質において「他の諸宗教とは明確に區別されたキリスト教をはつきり把握し信じていた。その受容の仕方はクエーカーの神秘主義を通してであるが、内容としては、正統的な贖罪の信仰を正確に把握したキリスト者であつた。」(註4) とはいうものの、一八八六年、米國バルチモアにおいてクエーカー教徒となり、生涯その信仰を貫いた新渡戸であつてみれば、人間観はより性善的なものであつたはずである。なぜならば、クエーカーの教理の根本には、カトリックとも、他のプロテスタントの大部分が持っている見解に反して、罪ではなく人間の善性を指示するものがあるからである。(註5) 勿論、

クエーカーの教理において人間の善性が説かれ、完全なる存在になることが可能であるとされても、それが、「自己満足の静止状態ではない」「更に成長を望み得るばかりか、成長を必要とする」ものであり、「完全の状態は、得られると同様失われもする」(註6)とされてはいる。しかし、先の文章からも理解されるように、説くところの自然観——人間観は、多分に神秘主義的な様相をおびていたことは否めぬ事実なのである。勿論、今ここで新渡戸の信仰の非正統性について論ずるつもりはないが、少なくとも有島は新渡戸から学んだものがそのようなものであったということができそうである。とくに有島の定山溪での信仰告白が、その内容を景観的自然が、「神の衣裳」であることへの変化ということで説明されるということは、カーライル流の自然観への飛躍を意味し、さらには、そのカーライル流の自然観を自家菜籠中のものとして教えていた新渡戸の自然観への転回を意味しているのである。このことは、それに伴う人間観も必然的に有島に受容されたであろうことは想像に難くない。後に自らの否定的な存在であることを痛感せしめられた時期の有島が、

此夜家より「太陽」送り来る。新渡戸氏の文あり。余は是れを読みて涙をおとせり。

札幌にありし彼の面影は余の眼には漸く薄らぎ行くを覺ゆ。余は尚彼の principle を疑ふ事をせじ。そは一人の信じたるものを失うは、余に取りては無上の苦痛なればなり。されども余の胸は静かなること能はず。(明38・1・5、日記)

と言って新渡戸からの離反を思わせられているところをみてもそのことは明らかである。有島の、

夜 Brooklyn に Mr. Perry を訪ふ。新渡戸氏夫妻の友人なり。よき人々なり。余はよき人々に少しく飽きたり。(明38・1・4、日記)

は、その意味でまことに象徴的であるといえよう。

有島が自己の生命の無限の可能性を希求する者であるが故に、自然主義でいうところの科学的自然観を一種の疎外するものとして否定したことはすでに「(一)」で述べたところであって、これが有島の自然観の思想的背景であるとは思えない。むしろ、有島が、自然を「完全なる存在」として見る思想的背景の淵源は、「神の衣裳」であるが故に完全だとするロマンチズムの世界観につながるものと見た方が妥当であろう。十九世紀のローマン主義の詩人たちが、自然を大文字化し、人間をも同様に聖なる存在であると考えたその考え方が、(註7)有島の精神構造の基底部を形成していたということになるのである。このことは、有島のキリスト教信仰を考える場合非常に重要なことである。元来キリスト教の世界観は、自然を神聖化する一種の世俗主義に対して、自然を被造物であるという意味において徹底的に世俗化することを根本理念とするデュリタニズムを内容とするものである。(註8)それが、有島においていわゆる信仰告白のときに、否定されるものとして処理されることなく、むしろ自然を完全なる存在として考えるという意味において世俗主義化することによって信仰の基礎としたということは、その精神構造の内部に、キリスト教会の中心的な理念であるデュリタニズムと本質的には相克の関係にあるものを、未処理のままに取り込み共存させてしまったことになるのである。定山溪での宗教的体験を一般的に信仰告白の時として、しかもそれを森本厚吉がキリスト教信者であったが故にキリスト教入信の時としているわけであるが、厳密な意味では、キリスト教入信の時とすることはできないのである。有島自身「リビングストーン伝」第四版の序において、この時のことを「基督教の思想に導びかれた」といい、「宗教的有頂天」という言葉を用いて回想していることも今にして思えばその宗教的体験の内容を顧慮してのことであろうと思われるのである。ちなみに、有島がキリスト教会に正式に加わったのは、上杉省吾氏の調査によると明治三十四年四月五日のことである。(註9)

キリスト教の入信前に有島の精神構造に受容され定着した自然観が、多分に、

宗教的雰囲気を横溢させていたものであったにもかかわらず本質的にはキリスト教と無関係のものであったということが、それがキリスト教離反以後においても、なお有島の自然観の内容をなしていたことの一つの裏づけとなるのであるが、有島のとくに教会退会後のホイットマンへの傾倒が、その事実を裏証していることができよう。有島のホイットマンへの傾倒についてはすでに周知のことである。

ホイットマンが、

思ふに私は野獣となつてそれと共に生活することが出来そうだ、彼等はそれほど落つき拂つて自分に満足してゐる、

私は立ち止つて永くく彼等を見守つてゐる、

彼等はその境遇にやきもきしたり泣きべそをかいたりはしない、

彼等は暗闇の中に眼をさまして自分の罪をなげきながら横はるやうなことはない。〔有島武郎訳「自己を歌ふ」第三十二篇、ホイットマン詩集、第二輯〕

と歌つて、人間が罪の意識から解放されたときに、人生は輝かしいものになると確信することができたのは、「私はワルト・ホキットマン、一つの宇宙」〔同前・第24篇〕と、たからかに歌うことができたからである。そこには、自然と対比されて不完全さを思わねばならぬ人間は存在しない。否むしろ、その自然それ自体であることの喜びが、ホイットマンを生き生きとした存在にしている根拠なのである。有島のそのようなホイットマンへの傾倒、ホイットマンの生き方の中に自らの生の理想像を見い出そうとしたことは、決して本質的には新しい事ではなかったということができるのである。なぜならホイットマンの可能性は、ロマン詩人たちの可能性の延長線上に位置するものだったからである。(註10)

ただここで一つ注意しておかねばならぬことは、教会への入会、そして米國

留学を通して教会退会、キリスト教離反という経緯を経た有島にとって、キリスト教入信前の自然観——人間観は、現実から理想へと変化してしまつたことである。そこには、もはや新渡戸の教えた「理想の中に実在なるものが含んで居り、又実在と云ふ中に理想が含んで居る」〔「ゲーテとカーライル」〕「随想録」所収〕というカーライルの教訓はなくなつてしまつたと言わねばならないだろう。それが、決定的な自己認識における否定を実感してからの復帰であるだけに、より「完全なる存在」として認識せざるをえなかつたのである。そのことが、自然をかえつて完全さにおいて固定化し、実体化し、ときには、神格化して独立した存在として認識する原因にもなるのである。

#### 四

教会退会後の、とくに後期の自然観の本質を「完全なる自然」というかたちで見えて来たわけであるが、もう一つの特色は、その自然と人間との関わりを關う關係においてとらえていることである。

人間の力は自然の力よりも小さく弱い。然しながら人間は已む時なく自然に對して反逆し、自然と戦鬪し自然を征服しようとする衝動を捨て去ることができません。〔「生活と文学」大9～10〕

あるときには、人間が創造という営みを持っているが故に「自然を克服して新しい存在へと乗り越え移り変つて行く」〔「余裕と文化」大10・6〕可能性を持っているというのである。その場合の自然は「到るところに陥穽を用意してゐる」〔「己れを主とするもの」大11・6〕「徹底的には人間の敵である大自然」〔「生活と文学」〕だといふのである。自然との有機的な結合、すなわち、完全なる自然との調和の中に自己を見い出さんとする自然観に立ちながら、他方では、その自然との関わりが「戦鬪」であり、「征服」であるとしなければ

ならなかったのは何故であろうか、有島にとって「完全なる自然」との調和が困難であったということが、そのような言葉づかいになって表われたのだという以外に理由があるとすれば、それはいったい何であろうか。この問題を人間を自然と対立的な関係において描いていると思われる『カインの末裔』(大6・7)に即して考察してみたい。

\* \* \*

『カインの末裔』は、大正八年七月、「新潮」に書いた自作の説明『自己を描出したに外ならない「カインの末裔」』をひきあいに出すまでもなく、自然と人間との闘争を通して、人間が苦悩する様を描いた作品である。その意味では、有島の自然観を知るための恰好の作品であるということができよう。

『カインの末裔』に描かれている農民は、仁右衛門ともども自然との関わりにおいてまず闘わねばならぬ人間の一群である。

濡れたままに積み重ねておいた汚れ物をかけた小舎からはあらん限りの農夫の家族が武器を持って畑に出た。自然に刃向ふ必死な争闘の幕は開かれた。(傍点筆者)

自然に対して、敢然と立ち向った農民たちの試みは、やがて自然のしたたかな勝利を目のあたりにしなければならぬ時を迎えるのである。

春先の長雨を償ふやうに、雨は一滴も降らなかつた。秋に収穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に変つた。自然に抵抗し切れない失望の音が黙りこくつた農夫の姿から叫ばれた。(傍点筆者)

冬は遠慮なく進んで行つた。(中略)人間の哀れな敗残の跡を物語る畑も、

勝ち誇つた自然の領土である森林も、等しなみに雪の下に埋もれて行つた。

(傍点筆者)

プラオで働き起こされた土の香を嗅ぐことによって、体内の血に力を感じる仁右衛門、それは、まさに「自然から今切り取つたばかりのやうな男」だからであり、元来、自然の一分身にはかならない。そのような存在でありながら、なぜ人間は、仁右衛門は、自然と闘わなければならないのであろうか。有島は「掘り出された以上は、それが一人の人間であつて、その母胎なる自然と噛み合はなければならない運命を荷ふ」(『自己を描出したに外ならない「カインの末裔」』)という。つまり、自然の一分身でありながら、掘り出された存在である以上——自然ではなく、人間である以上、自然と対立的な関係に立たなければならぬというのである。ここで再びそれは何故かと問わねばならない。有島は人間の掘り出された状況に、いかなる意味をもたせようとしているのであろうか。この問題を自然との闘いにおいて敗れる仁右衛門を、有島があえてカインの末裔と呼んだことを通して考えてみよう。

有島というカインの末裔像を考察するために、『自己を描写したに外ならない「カインの末裔」』をとりあげてみたい。この中で有島は、カインの末裔である仁右衛門を、

- (1) 自然から掘り出されたばかりの男
- (2) 母胎なる自然と噛み合わねばならぬ存在
- (3) 人間社会とも噛み合わねばならぬ存在
- (4) 人間と融和していく術に疎く、自然を征伏して行く業に暗い存在
- (5) それにも拘らず、そのディレンマのうちにあって生きねばならぬ激しい衝動に駆り立てられている存在
- (6) 以上の結果、人間からは度外視され、自然からは継子あつかいされる存在

として描いている。

まず、有島のいうカイン像としての仁右衛門の属性のうちには、多分にアダムの倣をとどめていることに気がつくであろう。すなわち先述の属性のうち(1)(2)がそれにあたるのである。(註11)

腕と額に汗せしはアダムなりき。而して見よ、今もアダムの未畜野に立てり。

〔略〕地の上に生けるものの中、自然に対して最初の反逆を企て今も抗争苦闘を続けつゝあるものは彼〔農夫〕なり。〔「北欧文学が与ふる教訓」帰朝後札幌時代〕

土を耕す者という意味では、アダムにもカインにも共通のことであるが、それが、人間の原罪に対する罰としての労働であるならばそれはまさしくアダムに課せられた桎梏なのである。カイン像の中にアダムのイメージが混在しているということの中に、実は、カインが有島の理解において自然と戦う関係に、――それは調和ではなくあくまでも闘う関係である――立たされている者であることの暗黙の了解があるのではないだろうか。

自然が人間を追いつめる存在であり単なる背景ではないという指摘(註12)は、その意味ではまことに的を得たものであるが、しからば自然と人間とが、なぜ戦う関係として把握されているのかという問に対する答としては、このアダム像にみられる自然と抗争する者のイメージが、有島の対自然観――人間観の中核をなしているということができよう。ここに有島の、自然に対して真正面から対峙しようとする人間の基本的な姿勢の原型を見出すことができるのである。それは有島のキリスト教教義に対する一種の挑戦でもあったはずである。人間が、自らの自由意志で労働し、実りを得る生活こそ、最も自由な存在であることの保証だからである。勿論、自然との戦いに敗れる存在を描いたからといって、すぐさま有島がキリスト教教義の桎梏から解放されていないから

論断することはできないが、このような人間像が、キリスト教の有島に対する影響の一つであるということはできるのである。少なくともそれは、人間が、自らの生の保証を得るために、自然と闘わねばならぬ人間像を可能にしたということができる。有島にとって掘り出された者である、ということは、自然に勝利することの確証を得たとき初めて明らかにすることのできる敵の本拠地であったはずである。それにも拘らず、むしろそれとは逆の、土に帰るべき、ちりに帰るべき運命をもった者、すなわち滅びるべき存在であることを否定できないままに仁右衛門を雪の原野に放浪させなければならなかったところに、有島の自己認識における否定の実態を見ることができるのである。

ところで、旧約聖書第四章に描かれているカインは、弟アベルを殺したことによって、

(i) 呪われた存在である

(ii) 土を耕す者でありながら土は実を結ばない

(iii) 地上の放浪者となるべき者である

(iv) それにも拘らず神の恵の中に入れられた者である

と神から宣告された者なのである。

有島の否定的自己認識は、しばしばその状況を呪われた者として捉えられていたことを想起することができる。たとえば米田生活の体験に基づいて書かれた作品『迷路』(大6-17)の中で、有島の分身Aについて

貴様はカインと一諸に永遠に呪はれた靈魂だぞ

彼は罪の思ひ出のみに生きるカインのやうに、開校前の寂しい学校の夜を処嫌はず歩さまはつた。

と書いている。つまり、永遠に呪われた存在、罪を背負った存在が、有島にとつてはカインだったのである。勿論、『迷路』の先にあげた部分が、信仰離反以前の時代の有島を描いている部分であるために、あえてキリスト教的発想に基づいた人間観が描かれているということもできよう。しかし、『迷路』前篇の「暁暗」の結末の部分で、「僕の首途は血祭で呪はれた。或は血祭で祝福された。成就か死か」(傍点筆者)と自らの状況を、未決定の状況にある者として描かねばならなかった有島にとっては、実は、カインの末裔としての人間が真に人間性を回復された存在として認識されていない心的状況をあらわすのに最もふさわしい言葉として用いられているのではないかと思われるのである。

聖書の発想であるカインの人間は、少なくとも信仰離反とともに過去のものになっていたはずである。それにも拘らず『カインの末裔』を書き、現代においてもそのカインの末裔である人間が、呪われた存在であることを、まことに空しい実りのない業をなすつづけなければならぬ者であるというかたちで、しかもそれを自らの現実として認識しなければならなかった有島の人間観というのが、自然に敗れる人間、仁右衛門として形象化されているのではないだろうかと思われるのである。

先にも述べたように、有島は、自然に敗れた者を、「自然に継子扱いにされ」(6)「た者と考えているのである。つまり有島にとって、呪われた存在であり、実りを持ち得ぬ者であるということが、継子という言葉で認識され表明されているのである。聖書の発想に基づく否定的人間観とは直接結びつけて考えることはできないにしても、ここに有島の日常性の中で実感されつゝあった一つの状況をそのように認識していたという意味で有島の現実であったということができよう。「継子」、それは正統的な血脈の断たれた者をあらわす言葉である。つまり有島は、自らの内にある非正統性、換言すれば異端意識をこのように表現しているのである。思うに有島は、常にこの意識に悩まされ続けて来たのである。たとえば、『宣言一つ』(大11・1)の主張も、新たに興りつゝある第四階級が、歴史の必然性に支えられた存在であり、まさに歴史の正統な

嫡子であると観じ、それに反して自らは、所詮滅びゆく存在であるとした、いわゆるインテリゲンチヤの敗北論であったことも、その一例なのである。このいわば異端者意識もしくは歴史の傍流者意識というものが、有島のカインの末裔意識の現代的解釈であるということになる。

## 五

「一」において述べたように、有島は、ミレーが彼の生活において「人間と自然との有機的な融合を成就」(「ミレー礼讃」大6・3)することに、否定の真唯中において肯定を生むことのできたようには、自然に勝利することによって、完全なる自然との調和的關係に入ることはできなかった。しかし有島は、もっとちがったやり方で、自然との調和の關係に復帰することができたのである。それは、波多野春房あての遺書に見られるような、絶対的な否定——死——への無条件の服従という、もっとも有島的方法によってなのである。

『カインの末裔』のエピローグにおいて、自然に一切のものを奪われた仁右衛門夫婦が雪の中に消えていく場面を、仁右衛門の敗北と解釈するのが『カインの末裔』解釈のいわば定説である。前述の如く、それは有島の日常性において実感されている継子意識の芸術的形象であるという意味において正しい解釈であろう。しかし、仁右衛門が敗北宣言をせぬまゝに雪の中に消えて行く姿、それは、有島が、有島の調和の世界に復帰すべき存在であることを予見することのできる、まことに象徴的な後姿なのである。

『カインの末裔』の実質的な結末の部分、それは実は有島の遺書の中に見出すことができるのである。

善につれ悪につれ、それは運命が負うべきもののやうです。私達は運命に素直であつたばかりです。(畧)私達は遂に自然の大きな手で易々とかうまでさらわれてしまいました。(大12・6・8、波多野春房宛遺書、傍点筆者)



「自然の手で易々とかうまでさらわれてしまいました」というこの告白は、人間にとって、彼が聡明であればあるほど、人間と自然との力の差のもたらす絶望感が大きいものであり、そのために悲観的な厭世的領域に這入り込んでしまわざるを得ない状況から、人間が脱出するための唯一の方法として説かれて

いる。  
それから人間の所有する力を捨てて、深く大自然の前に降伏して、無我となつて自然の中に没入する外は亡くなるのです。〔「生活と文学」〕

という有島の考え方と等質のものである。この場合の自然は、決して単なる外界や環境であつたり「自然界の因果律」(註13)というようなものではなかつたはずである。すでに述べたように、有島は自然主義的な自然観は人間の可能性を疎外するものとして意識的に否定しているのである。勿論、それが完全なる自然だからといって、十九世紀のロマン詩人たちが人格化した自然そのものでもない。有島の聖化の完成、正統性の回復への志向は本質的には自らの限界状況——非正統性、継子性を否定することのできない有島の苦悩に支えられていたのであつて、そのような有島を、ありのままの姿で、全面的に抱擁してくれるものへの期待がこめられた自然であつたのである。そこで、はじめに「樂園を出たアダム」が生きていることのできる「私自身の地上生活及び天上生活」

〔「聖書の権威」大6・1、傍点筆者〕が始まるのである。それは、「愛の絶頂における死」(大12・6・9、森本厚吉宛遺書)や、「運命の目論見と人間の目論見の窮極的合致としての死」(「運命と人」大7・10)という言葉に見られる否定と肯定の同時的共存の可能な世界であるということができよう。元来、「自然の威力の大きさを思」(大10・5・27、有島信子宛書簡)い「結局は慈悲でも無慈悲でもない自然の意志に黙従するより道はありませんまい」(大12・5・15、谷川徹三宛書簡)と思われていた自然であるにも拘らず、あえて「運命に素直であつた」といって調和のイメージを付与しようとしたところに、

かえって有島の「生への激しい執着」を見ることのできるのである。それは、まさに絶対的な否定——死——への無条件の服従という方法でなされた有島の最後の自己肯定の試みでもあつたということができよう。

一見、肯定と否定との両面の価値を同時的に持っているように見える自然も、有島の精神構造の基底部を形成している否定の直接的、二重否定的顕現であるということになる。その意味ではまさに心象であつたわけであるが、それが、有島に本能的生活を阻止する力、つまり「運命」として不可抗的にせまってくるときに、「自然の大きな手」という意志ある自然のイメージをとってくるのである。

ここに、有島の運命観の考察の意義とその可能性を見出すことができるのである。(註14)

(一九六八・五・二九)

#### 追記

本稿は、梅光女学院大学国語国文学会(昭42・11・11)において行なつた同題の研究発表を補訂したものである。

註1 志賀直哉の自然観については稿を改めて考察する予定である。

2 有島武郎伝・3 楡の樹蔭——札幌農学時代——「文芸」昭38・11

3 武田清子、キリスト教受容の方法とその課題——新渡戸稲造の思想をめぐって——「思想史の方法と対象」所収

4 註3に同じ。

5 罪から完全に自由になることを不可能とする教理はクエーカーから見れば全くの敗北主義であった。(「ハワード・プリントン『クエーカー三百年史』」)

14 拙稿有島武郎研究——運命観をめぐって——「梅光女学院大学国文学研究」第3号、昭42・11

6 註5に同じ。

7 ランダル・スチュワート、人間の神格化 『アメリカ文学とキリスト教』所収

8 大木英夫、近代世界の世俗化 『ピューリタン』所収

9 有島武郎のキリスト教入信とその周辺——新資料による覚え書——「国語国文研究」第31号・昭40・9

10 註7に同じ。

11 あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみを生じ、あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取れたのだから。あなたはちりだからちりに帰る。(旧約聖書創世記第三章一七節—十九節)

12 内田満、『カインの末裔』成立過程試論、『同志社国文学』第2号、昭42・3

13 西垣勤、「カインの末裔」について 『研究論集』第二冊、昭38・4